今日は、江戸時代に書かれた本『北越雪譜（ほくえつせっぷ）』にある話をします。

この本は、鈴木牧之（すずき　ぼくし）さんという人が書いた絵入りの本。チャプレンの「牧師」ではなくて、「牧之（ぼくし）」という名前の方が書いた本です。その中にある、私の好きな話を今から披露します。

二月、柴を刈りに山に入った男の人が、雪で滑って深い谷底に落ちてしまいました。

落ちる途中、持っていた食料や斧、山刀などの荷物はすべて吹っ飛び、谷底に着いた時には何も残ってはいませんでした。幸い雪の上だったのでけがはしませんでしたが、このままでは寒さとお腹が減って、いずれは死ぬことになるだろうと諦めに似た気持ちでいたところ、近くに洞窟を発見します。とにかくその中に入れば、寒さはしのげるし、雪を食べてしばらくは生き長らえることもできるだろうと考えて、洞窟に入って行きました。

洞窟の中は真っ暗で、はいながら進むと、なぜだかだんだん温かくなってきます。「変だぞ。」と、思いながらもさらに進むと、手に毛むくじゃらの物が当たりました。

気がつくとそれはまさしく「熊」でした。男の人はまた絶望します。どの道、飢えて死ぬのだから、今ひと思いに熊に食われて死んでしまった方がましかもしれないなどと考えていると、熊が寝ていた場所から移動して、さもここに来いと言っているようなしぐさをするので、そこに行くと、こたつに入っているような温かさ。そうこうするうちに、熊が男の人の顔に何度か手を優しく押し付けてきます。最初何だかわからなかったけれど、熊は蜂蜜が好物で、ミツバチの巣を手で壊して、蜜をなめる事を思い出し、どうも熊は自分の手をなめるように言っているのに違いないと思った男の人は、熊の手をペロリ。少し苦かったけれど、蜂蜜の甘い味がして、のどの渇きが癒えるようでした。その後熊が横になると、男の人は背中合わせで熊と寝たのだそうです。その日から洞窟での熊と男の人の生活が始まります。お腹がすくと男の人は、熊の手をなめて飢えをしのいだようです。

雪解けも近づいたある日の事、男の人が洞窟の入り口に座って日向ぼっこをしていると、熊が男の袖をくわえて引っ張ります。引っ張られるままについていくと、そこは男の人が転げ落ちてきた場所。そこから熊は前足で上手に雪を掻きながら進んでいきます。熊の作ってくれた道を進むうち、人の足跡が行きかう場所に着きました。そこで熊はあたりをゆっくり見回すと、山へ戻っていったのだとか。

男の人は、熊の後ろ姿を拝みながら見送った後、家に帰りました。家に着くと村の人々が集まり、なんと、四十九日のまっ最中。男の人はとっくに死んだと思い、法事をしていたところ、ガリガリにやせて、ひげぼうぼうの男の人が帰ってきたものですから、村の人は幽霊が出たと思い大騒ぎ。男の人が幽霊ではなくて「本人」だと分かると、法事が一転、歓迎のパーティーになったのだそうな…。

さて、各地で人が熊に襲われるケースが過去最多のようです。餌のドングリなどが少ないこと。熊の数も増えている事。熊と人間が生活する境目があいまいになってきたことが理由のようです。人間の出すゴミが、熊を呼び寄せているようなこともあるようです。

グローバルエクスカーションの北海道コースで、釧路湿原を散策する際、リュックにお菓子などを入れていくのは厳禁と、ガイドさんに教えられます。熊は鼻がよいので、それにつられて人の前にやってこないように、熊を刺激しないようにするためです。

熊に遭遇したら、首や頭を押さえて死んだふりをするとよいとか言われますが、完璧ではないようです。熊は蛇が嫌いなので、ゴムでできたおもちゃの蛇を投げつけるとよいというような話を、何かの本で読んだ気もします。自分から実験したいとは思いませんが…。

先ほどの話のように、熊と人間が仲よく暮らせるとよいのですが。ハーフターム・ホリデー中、君たちが各地で、熊に遭遇しませんように。熊を刺激しないで、人との距離を保てるような方法を、人間が本気で、知恵を絞って考える時期なのかもしれません。

（立教小学校校長　田代　正行）